

## 7月22日（土）1日目

朝8時半。鹿児島空港全日空出発ロビー、トレードマークであるピスタチオグリーンの特製Tシャツがぼつりぼつりと現れ始めた。男の子4名、女の子4名。今年は事前に搭乗券が発券できていたため、子どもたち一人ひとりでチェックイン(荷物預け)をしてもらうことにしていた。鹿児島—那覇間がANA、那覇—石垣間がSNAだが共同運航便ということで最終目的地まで荷物を届けてもらうことができる為、その旨チェックインカウンターで伝えなければならない。少し緊張気味だが、みな家族の力を借りつつ、滞りなく荷物を預けていく。大きな釣り竿を持参した男の子も、ちゃんと取扱注意の札をつけて預けることができた。その後、朝ごはんを済ませる者、ランチを購入する者、すでに友だちとトランプして遊ぶ者、家族と空港見物をする者…それぞれが思い思いに過ごし、再び9時20分に手荷物検査ゲートに集合。

ゲート前で、記念すべき一枚目の集合写真をパチリ。ここからが本当の出発点。家族と別れての、8日間という長い冒険のスタートだ。手荷物は、水筒とお弁当がきれいに詰め込まれたリュックのみ。検査ゲートでは感動的な出発シーンを演出したいところだが、実際は、列に並びながら手際よく水筒を出し、ゲート通過後はキャップを開封したりチェック機械に乗せたりと、家族や故郷に手を振って別れを惜しんでいる余裕はない。チケットのバーコードを改札に通し、手荷物を通過させ、再びきれいにパッキング…後ろから押し寄せてくる乗客たちの流れに乗って、低学年であっても自分のことはすべてやってもらう。これを旅の間4回。最近では、飛行機に乗り慣れている子も多く意外とスムーズ。何とか全員、自力で通過した。

9時55分発那覇行。丁度、東京出張が重なったという父親が一人、搭乗ゲートまで同行してくれた。しかし肝心の我が子らは、その存在にほとんど気を留めず、出発を目前にワクワクしている様子だ。夏の那覇行きとあって飛行機は混んでいるが、座席が後方ということもあり優先搭乗することになった。座席によっては一般の方と並んで座る子もいたが、みな礼儀正しく挨拶や会話などしていた。機内サービスも自分で注文する。りんごジュースやスープなど、好きなものを好きなだけ？というより、勇気がある分だけ、注文。皆、2杯ほどおかわりしていた。

那覇は晴れ。雲は多いが沖縄の夏らしい空、海。到着すると真っ先に、那覇空港の規模や様子の違いに子どもたちは毎回驚く。上空から見えたアメリカ軍居住地や基地、(肌の色も体格も違う迷彩色の洋服を着た、外国人客の多さよ…)、滑走路ですれ違った自衛隊機、戦闘機などは、男の子を中心に特に興味深かったようだ。2機が一気に飛び立つところを見て、旅客機との違いをその爆音と異様なフォルムで体感した。

那覇での乗り継ぎまでには30分程度しかなかったが、ゲートが近くだったため、みやげ屋を覗きながら移動しゆったり搭乗。一方で、那覇―石垣路線は、上昇したらすぐ下降する、大変短いフライトである。その中で、タイミングを計りながら、手際よく弁当を食べなければならない。6人については最前列でまとまって席が取れ、途中、ケラマ諸島や宮古島を目下に皆で楽しく会話しながら、初めてのランチを取った。離れた席の2人については、それぞれバラバラで優先搭乗のタイミングも異なり、ほぼ一人旅の状況。中1、小5の男の子2人に挑戦してもらった。小5の男の子は、持参した分厚い小説を読みながら、一般客に挟まれた真ん中のシートで、しっかり弁当を食べたようだ。

13時30分、石垣到着。荷物をターンテーブルで受け取る。自分の荷物は自分で管理。片道1500kmの移動である。この冒険は、乗り物の乗降や移動に慣れてもらわなければ成り立たない。荷物番を交代しながらトイレを済ませ、中学生を中心に忘れ物がないか互いに注意を払っている。要領の分かっているリピーターの女の子たちも頼もしい。彼女らに荷物のことは任せ、スタッフは港への移動バスの手配に離れる。到着ロビーには、柱状に作られた大きな水槽と色とりどりの熱帯魚が、今年も変わらず出迎えてくれる。その後、関西から既着の男性スタッフ1名と、東京から合流の補助スタッフを兼ねる女子高生1名が合流。子ども8名とスタッフ3名の総勢11名。予定通り、石垣港ターミナル行きのバスに乗る。刺すような亜熱帯の日差しは、今年も健在だ。

さて、石垣空港は、数年前に利便性の高かった港近くから牧草地とサトウキビ畑が広がる内陸部へ移転した。確か「大型機が離発着可能な長い滑走路を確保するため」だったのではと思う。新たな空港建設には、全島を挙げて、決着までにかかなりの時間や議論を要した。かれこれ25年も前になるが、学生時代、研究の一環で現地を頻りに訪れていた時期があった。当時、海沿いのある集落が候補地に挙がっていて、地域住民がものすごい反対運動をしていたのを覚えている。現在、石垣港へ向かうバスは、途中その集落近くをかすめるのだが、その度にあの頃盛んに活動していた青年らを思い出す。自然保護とか環境を守るとか、未来の子どもたちを思いつつ、生活や人生や財産をかけてやっていた彼らは、とても自分と同世代には思えなかった。そして、25年を経て、森の子どもたちにそんな話をしながら毎年ここを通ることになるとは夢にも思っていなかった。

石垣市街地は、商業地帯は本土と変わらない大型量販店やコンビニが幅をきかせ、沖縄らしさ、離島らしさはもう探さないと見つからない。時々目に留まる漆喰の家屋。その白い壁や目地が強い日差しでより白く光っている。子宮をかたどっていると言われている大きな墓、屋根に乗っているシーサーをみつけたら、急いで解説しなければ、次にいつその機会が巡ってくるか分からないほど、島の様子は変わっていつている。

男の子たちは、長い移動にやや疲れ気味だが、その点、リピーターの女の子たちは車窓の景色を懐かしそうにみている。石垣港についた時には、トイレの場所も覚えていて、男の子をリードしていた。みやげ屋を一々覗きに行き興奮し「あれ買いたい！これ欲しい！」と騒ぐ彼らと比べ、目的は別の所にあるような落ち着いた行動は、貫禄すら感じる。

西表島への船は、ディーゼルエンジンの高速船。爆音と排気臭はそれなりにきついが、室内客室は冷房が効いており、音も程々静か。1人を除き男の子は室内へ。風や波、西表島の空気をすぐにも感じたいリピーターの女の子たちは、多少暑いも甲板席へ。海の色は、離島らしいエメラルドグリーンに。すでに沖縄本島よりも台湾に近い場所まで来た。甲板で、真っ白な波しぶきと心地よい海風を体中で感じる。360日前、必ずここへ戻ってくると心に誓った女の子たち。今日、この瞬間を待ちわびた彼女たちの思いは、南の風によって一路、西表島へ走る。途中、黒島へ寄港しながら乗船時間50分。17時30分、西表島大原港に無事到着。1日がかりの移動となった。

宿泊施設である<島時間>のオーナー兼ガイドの谷さんは、相変わらず多忙で、他のツアーの為不在。代わりに迎えてくれたのは、宿のスタッフ小林さんら4名。昨年、メインの食事会場だった外のテラスは、信じられないほどパッションフルーツが蔓をのぼし、涼しく広々とした木陰を提供していた。大きく成長したバナナはたわわに実をつけ、ヘチマがそれを足がかりに空へ日なたへと背伸びしていた。島内唯一の鉄筋コンクリートの建物は、昨年まで黄色の塗り壁が目立っていたが、南国の植物に覆われた今、すっかり島の景色に溶け込んでいた。玄関のブロック塀や棚には、たぶん私たちが使うであろうフェルトブーツやシュノーケル、ライフジャケットが整然と並んでいる。1年前と変わらない風景に、移動の疲れもすっかり忘れてしまう。

あてがわれた2階4部屋に、男女・年齢別に入室。今年はスタッフも同室。物干ができるベランダがついた和室6~7.5畳。ちょっとした板の間の空間には、小さなイスとテーブルがある。クーラー、テレビ、冷蔵庫、扇風機が無料完備。不便な西表島にあつて、快適すぎるほどの充実した設備。シャワールーム・トイレは共同だが、いたって清潔。外階段で1フロア上がれば、広々としたテラス。夜はそこから満点の星空を眺めることもできる。「ア～、今年も帰ってきた～♪♪」女の子たちが畳の上に寝そべり、伸びをしながら歓喜をあげる。そんな姿をみると「無事、1年前の約束を果たせてよかった～」と、こちらも一つ肩の荷が下りる。

荷ほどきを終え、18時夕食。食堂で谷さんと一年ぶりの再会。女の子たちは谷さんが顔を覚えてくれていて感激。何より、一年ぶりに再び訪れてくれた子どもたちに「よく来たなー！！ちゃんと覚えてるぞー！」と、谷さんも喜んでくれた。

滞在中の食事は、ランチを除いてすべてバイキング形式。実は、調理責任者のかあちゃんが、直前に利き腕の右手を骨折して食堂はしばらく営業休止に。宿泊者は他の食事処へ散り散りに毎食出掛けていた。しかし、私たちが今日から滞在するとあって、骨折ながらもスタッフ総出で食堂を再開してくれた。11人の大所帯で、こんな小さな島…毎晩食堂を手配したり移動の負担を考えたら、本当にありがたいことである。

とはいえ、食事が好みで偏るのもバイキングならでは。昨年参加した小5の女の子は、南国フルーツと野菜が口に合わずほとんど食べなかったようだが、親に促されたこともあり、今年是一口でも挑戦してみようと思って参加したようだ。ある日の朝食、彼女の皿には、小さなマンゴーが一切れのっていたし、夕飯のバイキングではゴーヤも取っていた。野菜嫌いの中1男児にも、体調や体力のことを第一優先に、出された野菜は少しでもいいかんら必ず取って完食することを約束させた。途中、小学生に甘え助けてもらいながら（怪しげな日も多々あったが）男子最年長のプライドもあり、まあまあ頑張っていたと思う。8日間24食しっかり食べて、冒険を120%楽しまなければ！

食後、シャワーを浴び、8時半過ぎから暗くなったのを見計らい、懐中電灯を持って周辺を散策することにした。宿から海（港）までは徒歩3分。新月近い夜空は真っ暗で、宿の玄関を出てすぐに天の川が確認できた。あまりの暗さに、みなびったりと互いに寄り添って離れず、なんだか暑苦しい。アスファルトの上を、ヤドカリがカタカタと小さな音を立てて移動している。高台の山影にコノハズクの「ホー、ホー」という鳴き声が響く。潮の香りが涼しい風によって子どもたちを包みこむ。「またここに来れた〜」。風の匂いで改めて実感する。さあ、明日からいよいよ本格始動。

## 7月23日（日）2日目

朝6時半すぎ。ラジオ体操に参加希望の子どもたちだが、日曜日で休みということもあり、少しゆっくり起床。布団をあげ身支度を整えて、7時朝食。5〜6種類の手作りサンドイッチ。ロールパン、黒糖パン、クロワッサンなどで、タマゴ、ツナ、ポテトサラダ、ハムチーズ、カボチャペースト、カレーなどが挟んである。マンゴーやパイナップルは、シーズン最後ということもあり、完熟している最高のものが食べ放題。宿の玄関でとれたパッションフルーツも所せましと並べられている。各種トロピカルジュースを始め、野菜ジュース、牛乳、オレンジジュースなど飲み物用冷蔵庫はカラフル。コーヒーやスープ、サラダ、ヨーグルトもあり、何から食べようか迷ってしまう。

子どもたちはあまりの豪華さに目移りして、あれもこれもと皿に取る。小2、小3の男

の子二人は、食べたい量と食べられる量が一致せず、信じられないほど大量のサンドイッチを盛ってきた。谷さんに「まずは体力！しっかり食べる」と声をかけられたこともあって、気合が入ったのかもしれない。スタッフが「取り過ぎでは？」「本当に食べきれるの？」と声をかけても「平気！」と男の子たち。しかし、食パン4枚分のサンドイッチが彼らに食べられるはずもなく、10分後には言葉数も少なくなり、目の前のサンドイッチの山にうなだれてしまう。島の食糧事情や残飯についても聞かされた、スタッフにも大口を叩いた、谷さんも仲間たちも僕らを見ている…そんな状況で、引くに引けなかったのだろう。二人は完食を目指す。気づくと目には涙がいっぱい。お腹いっぱい苦しくて、すでに味などよくわからなくなっている。周囲が「大丈夫なのか？」「もうやめたら？」と声をかけても諦めない。その様子を見て、同席していた小5と中1の男の子や、高校生が助け舟を出し、何とか残食なしで1回目の朝食を終えた。こんな些細な場面も、子どもたちにとっては一つ一つ挑戦なのだなど、これからの日々を改めて思った。

朝食後、8時にテラス集合。レンタル品一式のサイズ合わせだ。履きなれないフェルトブーツも、一度足にフィットすると自分の足と一体化し、まるで裸足のように心地よく感じる。ライフジャケットにはナンバリングがしてあり、自分の番号を覚えて1週間管理する。シュノーケルやフィンも同様に、そのサイズや形、色などの特徴を覚えて、たくさんの中から毎回自分のものを間違えずに取り出せるようにしなければならない。

活動ごと、活動場所ごとに道具の種類も持参方法も変わり、場合によってはそこに弁当やタオル、替えのサンダルが加わる。更に、どこに行くにも必ず持参しなければならないのが、飲料水。自分の水筒をこまめに洗浄し、宿に戻る度に氷を足し入れ、水を替えて常に満タンにしておく。できれば水筒以外にペットボトルにも水をいれて前日から凍らせ、予備として持ち歩く。年齢や体の大きさ問わず、飲み水だけは自己責任で持ち歩かなければならない。誰も補給する程余裕はない。このルーティンを毎回決められた時間までにミスなくこなすことが、この西表島ツアーの最低限の参加条件となる。日焼け止めを塗ったり、帰ってきたときのシャワーの準備や、部屋の施錠なども相まって、この出発準備がスムーズにできるようになるまで数日間…大人でもしばらく頭が混乱してしまう。

活動着は、水着やラッシュガード。活動によってはモンベルの長ズボンの時もあるが、それも活動内容から自分で考える。男の子たちは、場所のイメージや活動内容が湧かないわけだから、水着がよいかズボンがよいか悩むこともある。しかし、悩んだり躊躇したりしているうちに移動が始まり、問題が発生してしまえば、谷さんから厳しい激が飛ぶ。したがって、くよくよせずに分からないことはすぐに聞く。怒られるかもしれないけれど、何でも相談する。リピーターの女の子たちは、さすがに勝手がわかっていて、谷さんとの絶妙な距離感もつかんでいるし、準備も早い。

道具の扱いについても、かなり慎重さが求められる。道具は借り物である以上に、活動中に自分たちの命を守り、活動を充実させるためのものだ。不備があったり忘れていたりすればその日の活動に支障がでる。調子が悪い物については、出発前に自分で点検し見つけ修正しておかないと、自分の過失であろうとなかろうと最終的には自分に降りかかってくる。出発前の谷さんは、参加者すべての命を預かるガイドとして、この時間帯はかなり緊迫した空気感を醸し出している。その隙間をぬって、状況を明確に説明し相談することは、ちょっとした勇気とコツみたいなものがある。子どもたちは、怒られたり褒められたり笑われたりしながら、場の空気を読む力を身につけ、自分のペースをつかんでいく。

こうしたルーティンに関する習得力や適応力には、かなりの個人差がある。普段の吉野の活動をみても、準備や片付けが得意な子とそうでない子の差は、年齢問わず大きい。しかし、どんな子も経験を重ねることで確実に上達していく。8日間12アクティビティともなれば、その準備を繰り返すだけである種のトレーニングとなる。決まった時間に起きて身支度し、自分の意志で朝食を食べる。毎日様々な活動があり、活動後に片付けがある。道具類はすべて手で洗い、破損をチェックし、干し、所定の位置に戻さなければならない。加えて、アウトドアにおいて道具や計画、時間、ルーティンという概念がいかにシビアで重要な意味を持つかも、この行程を繰り返すことで理解していく。西表島は、川も海も山もすべてが手つかずの大自然で、判断を誤れば大参事につながる。毎年、水難事故が後を絶たないのも現実。すべて自分の命のためだ。本物は決して私たちに甘やかさない。自然を決して甘く見ないこと、侮らないこと、謙虚でいること、西表島の自然に触れることで、日々忘れがちなことを思い出す。

活動で身につけた水着や衣類も、洗濯機に放りこむ前にすべて下洗いを要する。塩抜きしないとすぐに痛むし、洗濯機に砂利や砂を入れたら故障の原因になる。いつもは周囲が知らず知らずにやってくれていることを、遊び疲れた体にムチ打って、8人は毎夕それぞれ繰り返す。性別や年齢は関係ない。自己管理できるようになることは、子どもたちに自信をつけさせ、彼らを精神的自立に導く。大変ではあるけれど、楽しいし、やりたいことだから頑張れる。そこに<やらされている>感は全くない。そういう自主的な場だからこそ、互いに教え合い、フォローし、失敗をくりかえしながらも、子どもたちはコツや効率を身につけ、日々成長していくことができる。

今年初の活動は、仲間川のカヌートレッキング。宿から車で10分ほどの仲間川下流カヌー基地に到着。今日は大潮。昼時が干潮。午前中は潮がぐんぐん引いていくので、上流に上るにはいつもの倍の腕力が必要。二人組になり、6艇が仲間川に漕ぎ出でる。河口付近では100m近い川幅があったところも、上流に進むにつれて細くなり、最後はマングローブに左右かこまれ1艇が進むのがせいぜいの幅の支流を進む。透き通る水の中には時折海

の魚と川の魚が行きかう。パドルからほとぼしる水しぶきは、想像以上に塩辛い。ここは汽水域。完全に海の水が勝っている。潮の引き加減を見ながら、浅瀬に取り残されないようにルートを選んでいく。時折パドルが川底につきそうになりながらも、奥へ上流へと進む。西表島の川は森と海をつなぐ血管のようなもの。西表島のありとあらゆる命の源。細い支流は毛細血管のようにマングローブ林の隅々まで行きわたる。アカショウビンの鳴き声が、広大なマングローブに響き渡る。限界まで上流へ行き、記念写真をとってから再び河口へ向かってこぎ戻る。すると、往路にはなかった大きな干潟が出現。黒い点々が無数に見える。カヌーを上陸させ、その正体を観察。ミナミコメツキガニの大群だ。走っていくと振動を察知し一斉に砂地に潜り込んでしまう。子どもたちの走るスピードと競争だ。コツを先につかんだのは子どもたち。逃げ遅れる無数のコメツキガニを、両手にあふれるほど採取した。スクリュウのようにくるくると潜るコメツキガニはとても愛くるしくて、見ていて飽きない。波打ち際につけていたつもりのカヌーは、気付けば水際より 10m も上に取り残されていた。子どもたちの影が、方々で小さな点になるほど、遠くまで歩いた。あちらこちらで、ハクセンシオマネキやツメタガニ、ミナミトビハゼが、大きな目を見開いてしつこく追い回す子どもたちから、そそくさと逃げていった。

午後は、環境省の野生生物保護センターへ。西表島の生態系や歴史、地理、環境について学ぶため毎年必ず訪れる。特に天然記念物や絶滅危惧種、特定生物などが多い西表島において、活動中、ふと希少種に遭遇する機会が多いため、ここでの知識や情報は大変重要なものとなる。イリオモテヤマネコに関するクイズは、今年も子どもたちに大人気、リピーターの女の子の中には、昨年の認定証を持参して上級にチャレンジする子もいた。

同センターへのアクセスは、島の動脈である公共バス。拠点の大原から 10 分の古見（こみ）で下車。西表島のバス事情は離島ならではの、県外の中古バスを下請けするので、全国の懐かしいバスが走っていたり、距離で金額が複雑に変わるため、自動払いの機械は使わず、その機械の上にプラスチック皿をおいて、運転手はその都度現金授受を行ったりとユニーク。時々、運賃に交じって差し入れの飴玉やチョコレートなどが入っていることもある。島内には所定のバス停があるものの、好きなどころから乗車でき降りることができる。両替機は使えないので、小銭や 1000 円札は必需品。1 万円札なんぞだしたら、怒られ降ろされる。昨年、お札を出したら「あそこの店で買い物して、小銭にしてこい」と怒鳴られたが、それがきっかけで仲良しになった強面グラサン運転手の兒玉さん！なんと今年の初バスで再会！「こんな何もない島に、また来たのかー（笑）」とお互いに再会を喜ぶ。もちろん今回も飴玉をプラ皿に投げ込み、バス停のない一番近い場所で下車させてもらった。

保護センターからの帰り道、スナックを食べつつ 700m ほどの坂を下りながらバス停へ

向かう。途中、道路沿いの展示林に植わっている 10メートルを超えるリュウキュウマツに、みんな飛びついて登り始めた。枝ぶりも大きく、足場もたくさんあるリュウキュウマツは、夕日を浴びながら子どもたちを包み込んでいた。

最寄りのバス停が近くなるころ、中 2 の女の子が「なんだかこのまま走りたい。大原まで（海岸線見ながら）走って帰ろうかな？」とつぶやいた。それをきっかけに、全員が兒玉さんの復路バスを待たずに、大原へむけて走り始めた。夕方とはいえ、まだ日差しは高く暑い。アップダウンがある田舎道。距離にして 8 km。アスファルトには、人気（ひとけ）も日陰も一切ない。事情を理解できない低学年も、みんなの動きにつられてバス停を後にしてしまう。途中、バスから「おーい、ほんとに乗らねーのか？」「大丈夫なのかよー？」と兒玉さんがスピードを落とし、子どもの姿をみつけるたびに声をかけてくれる。子どもたちは、いくつもの丘をまたいで長〜い列になりながら、笑顔でバスに手を振って全員乗車拒否の表明。乗客も「この暑さの中、信じられない。」と驚きを隠せない。結局、別ツア一帰りの谷さんの目に留まってしまい、「アホ！！死んじゃうぞ〜」と諭され、大型バンで順番に無念のリタイア&ピックアップ。完走できなくて心も体もムズムズしながらも、この炎天下、あといくつ丘を越えなければならなかったかを考えると、皆少し安堵した様子で宿に戻ってきた。暑くなった体に、谷さんがくれたパインアイスがおいしかった。

夕食を終えると、お小遣いを手に近くの玉盛スーパーへおやつを買いに行く子どもたち。21 円でばら売りしてくれるポッキンチューチューは、今年も大人気だ。店のオーナーも覚えてくれていて「今年も来たんだね、いつまで島にいるの？」と気さくに子どもたちに話しかけてくれる。鹿児島では、気にせずもらう持ち帰り用ビニール袋。西表島では有料だ。そのことに気づかず、貴重なお小遣いを目減りさせてしまった子どもは悔しそうに後悔していた。自分事となると誰でも真剣に考える。子どもたちは、どんなにかさばるおやつを買った日も、一人残らず「袋はいりません！」を 1 週間買った。

## 7 月 24 日（月）3 日目

6 時過ぎ起床。今日から地域のラジオ体操に参加。皆自主的にカードを持参し、すぐ近くの公民館へ足を運ぶ。聞きなれたラジオの導入部分から急にボリュームが上がってくると、ラジオ体操第一の BGM。大原にはこんなに子どもたちが住んでいたのかと思うほど、大勢の子どもたちが大きな円を作っている。「おはようございます！」と威勢のいい挨拶をきっかけに、そこに交わるピスタチオグリーンの特 T シャツ。毎年この風景を宿のテラスから見下ろすのがいい。ラジオ体操が終わると、地域のリーダーらしき大人が寄ってきて「どこから来たの？」「鹿児島です」「去年も来た子たち？」「はい！そうです。今年も来ました！」。



その後、小春ちゃんという 2 年生の人懐こい女の子が、地域のことや学校のことを色々教えてくれた。日中は暑くて、島の子どもたちは外には出てこないこと、大人用の自転車にも大原の子どもたちは乗れること、もうすぐお祭りだから太鼓や踊りの練習を毎晩していることなど。こういう地元との交流が嬉しい。明日もまた参加しよう♪という気持ちになる。「また明日ね」とバイバイして宿に戻った。

午前中は、大原から車で 5 分の豊原の浜でシュノーケルトレーニング。畑と海を隔てる防砂林をぬけると、オレンジ色の浜辺が延々と広がる。ポイントまで道具を担いで波打ち際の砂浜を歩く。キュッキュと砂が音を立てて、子どもたちの足にまとわりつく。真っ青な空には入道雲。空と雲と海と浜のコントラストが美しい。サンゴでできた狭い岩場をいくつも潜り抜けて、小さな日陰の拠点に到着。リピーターの女の子たちは、すぐに感を取り戻し、ささっと道具を身につけ、ガンガン泳いで、大きなタカラガイやクマノミを見つけていた。初めての男の子たちも、谷さんの指導のもと、すぐに慣れて自由に泳ぎ回る。場所によっては、遠浅で腹を海底に擦ってしまう場所もある。それだけ魚の生息域に迫って海の散歩ができる大潮のシュノーケル。深いところでも 3 m ほど。海の中から見上げると、子どもたちがまるで宇宙に浮いているみたい。

途中、おやつ休憩をはさみ 3 時間のシュノーケル。凍らせたゼリー、塩味のスナック、飴玉がとてもおいしい。どこまでも続くビーチには、私たち以外に誰もいない。遠く沖合で内海と太平洋を隔てるリーフに打ち付ける波音と、12 人のフィンの水しぶきの音だけが、夏空の下響いている。「地球に抱かれる」という感覚。

昼。一旦宿に戻り、ランチをテラスでいただく。着替えはなし。午後水着着用だから、玄関先で水着のままホースで塩水を落とすだけ。パッションフルーツの日陰が心地よい。メニューは八重山そば。小麦粉ベースで、カツオ風味、塩味と紅ショウガが絶妙の郷土の味、さっぱりうどん。本当においしい。暑い気候なのだが、不思議とこの味と温かいスープが、体にスーッと吸収されていく。

午後は、大原から車で 40 分のユツン川上流にある<マヤロックの滝>を目指すトレッキング。ユツン川は、仲間川と違って冷たい湧水が流れる真水の川だ。トレッキング開始後、20 分ほどして到着した溜まり池。勢いよく飛び込んで、亜熱帯とは思えない震えあがるほどの冷たさを実感。気持ちがいい！！もっともっと遊びたい気持ちを抑えて、更に岩場や森をぬけて支流をさかのぼること 20 分。途中、モダマの太いつたが行く手を遮る。鉄棒どころではない、直径 10cm ほどはある。一人ひとりぶら下がり記念撮影。そうこうしていると、急に森が開けた。3 つの連なる滝、マヤロックに到着。マヤは猫、ロックは岩を意味する。トレッキングで火照ったからだを再び冷やす。何度も飛び込み、滝を浴びて、凍え

るまで遊ぶ。唇が紫色になりながら凍えても遊び続ける子どもたち。いくら高いところから飛び込んでも足がつかないほどの滝つぼ。ライフジャケットの力を借りて、森の木漏れ日を浴びながら、プカプカ浮かんで空を見上げる。深く深呼吸しながら、今日も自然の恵みに感謝。体が気候にも慣れてきたのか、高学年や中学生を中心に歩くペースは毎日上がっていく。今日も午前中に泳いできたとは思えない速さで、とんとん拍子にトレイルを小走りに駆け降りる。スタッフはついていくのがやっと。底なしの子どもたちの体力。

車で戻り食事を済ませ、いつもの玉盛スーパーへの買い物を終える頃、子どもたちはそれぞれの部屋にこもり、ワークシートを記入するのが日課。滞在中は毎晩、ふりかえりの時間を1時間ほど取ることにしている。A4シートに、その日の出来事や感じたことを書き記した後、全員でシェアリングする。今年は更に、その日の活動写真をスライドショーで鑑賞することにした。子どもたちにとっては、こんな時間も楽しみの一つ。他の宿泊客からクレームが出るのではと思うほど、みんなで楽しく笑いあう。何枚映ったかの競い合いもあり、活動中もカメラを構えるとこぞってフレームに入ってくるようになったのも、この頃から。何しろにぎやかで仲よし家族のような、兄弟姉妹の今年の8人。ふりかえりを終え解散して間もなく、21時半には各部屋の明かりがすべて消え、すぐに寝息が聞こえてきた。

## 7月25日（火）4日目

今日は一日かけて、大原とはほぼ真逆に位置する浦内川を堪能する。浦内川は、沖縄県で一番長く、全長20km。下流からは遊覧船にのって8kmほど上ることができる。終着点の軍艦岩からはジャングルトレッキングのスタート。1時間弱でマリウドウの滝、その後45分でカンピレーの滝と、日本の滝100選や景勝地100選に選ばれている景色が次々と現れ、希少種が生息するエリアを抜けていくゴールドルート。トレッキング途中、岩場から滴り落ちる清水を、口に含む。苔むした岩をつたい、一滴がまとまって流れになり、川となる。透き通った清らかな水。小5の女の子は、「去年もこの水のんだ～」と嬉しそう。水筒の水を入れ替える。小3の女の子が一人ぼつんと後れを取る。暑さへの適応や移動の多さに疲れがでたのかもしれない。声をかけてもなかなかスピードが上がらず、完全に孤立。スタッフが中継しながら行きつ戻りつ、何とかはぐれないように列をつなぐ。他の子どもたちは絶好調で、小走りに近いステップでひよいひよいと飛んで進む。それでも時々後ろを振り返り、遅れている女の子に気をかける。そんな仲間の声かけやスタッフのフォローで、休むことなくコツコツと歩き続ける。

真っ青なしっぽのイシガキトカゲの群れ、キノボリトカゲは口に入れるポーズで記念写真。真っ赤なベンケイガニは、土をほって巣を作っている最中。吹き出す汗を時々拭きな

がら、ヒカゲヘゴやシダの森をぬけて、絶景カンピレーの滝へ無事到着。

川原で記念写真を撮ってから、とりあえずひと泳ぎ。ほどなくして小3の女の子も川原の子どもたちに合流し、ようやく笑顔がこぼれた。その後、持参したお弁当をほおぼる。星砂浜の食堂で調達する弁当はボリュームがあつて大きく、重たい上に子どもたちのリュックに収めにくいこともあり、谷さんとスタッフで分担し予備の水 8 リットルとともに全員分を運んでもらう。よく歩いたせいか、おなかペコペコ。あんなに重い思いをして長時間運んだわりに、全員一瞬で「ぺろり！」と完食。が、食べ終わった弁当ガラを、ポンポンとビニール袋の中に放り込んでいく子どもたちを見て、ややあきれ顔の谷さん。小分けの銀紙や箸袋、割りばし、ゴム、梅干しの種…細かく分別して片付け&パッキングが、自然とアウトドアをこよなく愛す谷さんの流儀。改めてゴミのこと、自然のことを考える場面となった。

さて、カンピレーに代表される板敷状の川辺では、ポットホールが観察できる。ポットホールは柔らかい砂岩質の岩盤に、水の流れの力で小石が長い年月をかけて少しずつ岩盤を削ってできた穴だ。大きなものでは直径が 1m、深さも 3m 位になる。ポットホールには水がたまっていて、大きな穴の中ではテナガエビやハゼなどの姿も見られ、また比較的小ぶりの所では、オタマジャクシが無数いる。少々バテ気味だった小3の女の子は、同学年の男の子と一緒に、自分たちのお気に入りのポットホールを見つけ、何度も飛び込んだり、取っ組み合って落とし込んだりを楽しんでいる。小5を筆頭に男の子たちは、弁当のご飯粒をエサに、テナガエビを夢中になって追いつづける。滝に打たれたり、滝の裏側へ回ったり、流れの強いところでは身を任せてキャニオニングをして川遊びを大満喫した。

カンピレーは有名な観光地ではあるが、観光客のほとんどは往復トレッキングをして滝の前で記念写真を撮って、すぐ引き返していく。日帰りでの来訪が多いからだ。その場合、軍艦岩からの下りの遊覧船、浦内川河口から上原港および大原港までの移動、各港から石垣港までの高速船など所要時間を考えると、川原で弁当を食べている余裕がないのである。たいていの観光客は石垣に宿泊し、日帰り諸島を訪ねる。なので、夕方の石垣島行き的高速船は、水着姿の軽装の観光客で毎日ごった返している。つまり、私たちがライフジャケットや弁当まで持参し、準備万端で川遊びしている光景はかなり珍しいことで、毎年9割以上の観光客が、森の子どもたちの楽しげな様子を恨めしそうにみながら、写真をとってそそくさ立ち去る。そして今年も、私たちはそのたくさんの背中を見送り、時に記念撮影のシャッターなど親切に押しあげながら、大きな優越感に浸らせてもらった。

散々遊んだ帰りの遊覧船では、船が底を擦るくらい潮が引き、マングローブの林に砂浜が広がった。最後の遊覧船が去れば、そこは人間が翌朝まで寄り付くことはない深い森。

両岸には様々な生き物が出現した。リュウキュウイノシシ、ムラサキサギ、リュウキュウアカショウビン、クロサギ、シロハラクイナ…。船底にも1m近いロウニンアジ。盛りだくさんの1日。帰りの車中は、みな爆睡だった。

そんな疲れた夜も、数十ページの漢字練習が課されているからと、休憩時間などに合間を見ては夏休みの宿題をしている中2の女の子。感心である。2回目の参加ということもあるが、日中は小学生の面倒をよく見てくれるし、荷物の整理や洗濯なども頼りになる。何より、本人がこの旅を一瞬一瞬心から楽しんでいる。大声で笑い、やりたい！と思ったことには躊躇せず果敢にチャレンジする。そんな彼女をみて、誰より嬉しいのは谷さんだろう。昨年よりも断然谷さんとの心の距離が近づいている気がする。

## 7月26日（水）5日目

午前中、仲間川流域展望台を目指し、宿から15分ぐらいの高台ポイントから、旧道を探検に歩く。実は、西表島には一周道路は存在しない。一周道路を作ろうと工事が始まって間もなく、イリオモテヤマネコが発見され、以降中断したからだ。当時、途中まで二車線で作られていた道は、半分がジャングルに飲み込まれてしまっており、植物の生命力のすさまじさを見せつけられた。断続的に降るスコールが涼しく、クワズイモの葉を傘に、ご機嫌で歩く子どもたち。途中、クイナ、セマルハコガメ、アオスジアゲハに遭遇。おなじみのイシガキトカゲは群れで、リュウキュウアカショウビンは頭上をかすめていった。仲間川上流の展望台から、マングローブを右へ左へ蛇行しながら川を上る遊覧船を見下ろす。川の流れに逆らって大変そうだ。打ち付けるようなスコールの中、遠くにエメラルドグリーンの海を見る。その絶景は、よくガイドブックにも取り上げられている。

探索しながら、様々な野草を食べた。中には高級食材やアダンの実もあった。アダンはパイナップルに似ている植物で、食べることもできる。木登りの得意な中1の男の子が、アダンの実を取るべく、ひょいひょいと見事に登っていく。木肌は、棘ほどではないが所々ザラザラしていて、滑りにくいものの衣類が引っかかる。甘い香りに誘われて、アリも木肌を行列していたが、めげずに実のついている先端まで行きついた。残念ながら熟していなかったので試食はできなかったが、じっくり観察することができた。

事件が起きたのはそれからほどなくして。原因は<クワズイモ>。あまりにも立派なクワズイモの茎をみて、スタッフが興味本位にかじってみたことが引き金だ。一瞬ふわっと甘味が膨らみ「うまい！」と思い、破片を飲み込んだ途端、喉がやけるようにヒリヒリし始めたという。咳き込みながら吐き出すスタッフの様子をみて、「うまい！」につられてか

じってしまっていた小3の男の子も吐き出した。しかし、すでに手遅れ。二人はこの後、午後までひどい喉の激痛に苦しむことになる。飴をなめたり、うがいしたりしてもほとんど効果がない。涙をにじませながらも泣き言を言わず、耐える男の子。その姿は、そこにいた大人全員が、替われるものなら替わってやりたいと思うほど痛々しかった。なのに本人ときたら、『クワズイモ』というぐらいだから、ご先祖は苦勞した上で色々考えて命名してくれたんだろうね。バカだねえ、僕たちは。歴史は繰り返すというか…(～\_～)」などと、ガラガラ声で話し、時々笑みすら浮かべ、気を紛らわしている。立派だった。たぶん、彼でなければ乗り越えられなかっただろう。ランチは、宿に戻ってタコライス。ランチが始まるころには、何とか固形物を飲み込むことができたが、それでもイガイガは続いていたという。名前通り、さすが<クワズイモ>。

午後は、宿から10分ほどの南風見田（はえみだ）の浜へ。遠浅の海。ジュゴンのように深さ50～60cmの藻場を、海底をつかみながら進むと、水中メガネの目の前を様々な熱帯魚が横切る。沖合には最南端の波照間島。おやつは、谷さんのはからいで、地域で生産されたパイナップルを丸々1個ずつほおぼる。塩味がさらにパイナップルの甘味を引き立ててくれる。浜にはウミガメの産卵跡。打ち上げられた巨大な貝殻。一方で隣国からのペットボトルや定置網の残骸。自然の美しさとのギャップ。日本語が印字されたゴミの行く末が気になる。初体験の男の子たちも、シュノーケルがかなり様になってきた。海の中での装着やゴムの調整、休憩、静止などなど、クライマックスの秘境シュノーケルにむけて準備万端だ。一方で、すっかり兄弟のように打ち解けている子どもたち。年齢を超え、砂なげ遊びをしたり陣地取りをしたり、替え歌を大声で歌ってみんなで大笑い。見ていてほほえましい。

谷さんのアイデアで、3グループに分かれて浜辺リレーもした。100m近い距離を本気で走る。それも2セット。さながら運動部の合宿である。しかし、ついていけないのはスタッフだけ。ゴール手前で倒れこむスタッフの心拍は、帰宿までなかなか下がらず死ぬかと思った。子どもたちは軽やかに夏の空の下、砂浜を颯爽と駆けていった。スタッフのせいでビリになったチームメイトから、倒れこんだ頭上に怒号が飛ぶ（ごめんね、昔はこれでもリレーの選手だったんだけど…）。いつまでも起き上がれず、暑い砂浜に横たわりながら波打ち際に目をやると、波間に逆さになった波照間島が見える。今日もこの広い太平洋を貸切りだ。

夜は、念願のナイトツアー。日の入りが遅い西表島。暗くなるのを待って出発すると八時半過ぎ。まずは宿から車で1分の船着き場へ。車から降りると、「膝まで海に入ってください」と谷さん。網を持って真っ暗な海に恐る恐る足を運ぶ。網を海水の中に入れ、左右に動かすと、コバルトブルーの波が起きた。夜光虫だ。振動によって発色する夜光虫。きれ

いな海にしか生息しない。網ですくって見てみても、何もいない。何度も何度も繰り返す。自然が作り出す美しい色。ヤドカリが、カラカラと小さな音をたててアスファルトを歩く。ムラサキオカヤドカリは、大きな爪が蓋替わり。昨年参加した小5の女の子は、その持ち方もよく覚えていた。海につながる駐車場の砂利スペースには、なんとウミヘビも。交尾や産卵のため上陸するらしい。可愛い顔ながら、毒はハブの10倍。沖縄ではイラブともよび高級食材。シュノーケル中にも遭遇することが多いが、まさか陸上でお目にかかれるとは思ってしなかった。海で泳ぐへびらしく、しっぽは魚のようなヒレ状で、子どもたちも驚いていた。

車2台に分かれ、子どもたちは全員谷さんの車で移動。目的地の南風見田の浜までの道中は、昼間とはガラリとその表情が一変する。道路沿いの電線にはフルーツバット、コノハズクといった夜行性の鳥類。道路には、カエル類やヤドカリ類、カニ類などが右から左から出没する。その度に谷さんは車を止め、子どもたちは降りて観察する。20cmほどのオカガニもアスファルトを歩いていて、さっそく子どもたちの観察餌食になった。

ほどなくして、南風見田の駐車場へ到着。ここからシュノーケルをした海岸までは3分ほど茂みを歩く。昼間は木陰が気持ちよかったが、夜はさすがに真っ暗。おまけに月齢も若いから、なお暗い。バディを組んで懐中電灯も消して進む。ふと左右を見ると、足元の草地にエメラルドグリーンの天の川！！ヤエヤマヒメホタルの群生だ。夕暮れから1時間しか発光しない。湿度の高い山林や森林に生息し、幼虫の間は川でなくて陸で生活する珍しいホタル。まるでプラネタリウムにいるような景色だった。茂みを抜ければ、浜に出て、今度は本物の天の川と満点の星空が空一面に広がる。大きな流れ星が一つ。水平線から立ち上がる天の川は、私たちを覆うように天上に伸びる。木星が一等星並みに輝いている。

星の光を頼りに海岸線を進むと、昼間通ったサンゴ岩の壁にたどり着く。すると、目の高さの割れ目に大きなヤシガニを発見！周囲を見ると、小ぶりだが一匹、ちょうど子どもたちの目線に沿うように壁をよじ登っているのもいた。掴み方のコツを教わった小5、中1の男の子がチャレンジ。小5の女の子も果敢に挑む。持ち方を誤ると、鋭い爪が指を切り落とすほどの力で抵抗する。岩場から引きはがされるのが分かると、ものすごい力で見ついて離れない。子どもたちも必死だ。ヤドカリの仲間世界最大級。2年越しでようやく会えた感動の瞬間に、しばし浸る。

帰り道、ゆっくりとしたスピードで走っていると、山側から海側のサトウキビ畑に向かって走り抜ける4本足の影。イノシシ？と思った正体は、イリオモテヤマネコだった。比較的大きかったが子猫だったのか、畑に逃げ込んだ後も、道路沿いから当てられる懐中電灯に引きつけられるようにこちらを見ている。目はキラリと光り、敵を動くシルエットは

寸胴ながらも精悍な顔立ちを想像させる。10 分間、私たちを楽しませてくれたイリオモテヤマネコは、親猫を追うようにサトウキビ畑の奥へ姿を消した。翌朝、子どもたちの発案で野生生物保護センターへ発見の通報をしよう！ということになった。谷さんに得意げに相談してみると、「通報すると、注意喚起の看板が立ち、観光客がどっと押し寄せ、結果的に車にひかれるなどの事故が後を絶たない」という。イリオモテヤマネコの生息地は、決して深い森の中ではなく、実は人間の生活圏と重なる沿岸部。現在 100 匹程度しか現存しない生きた化石イリオモテヤマネコ。少しはしゃいでいた子どもたちに、谷さんの言葉は重く響いたようだった。

## 7月27日（木）6日目

「川でもっと遊びたい！」という子どもたちのリクエストに応じて、ユツン川溪流の沢登りに出かける。谷さんが体を張って開拓したコースで、もちろん、他の観光客などいない。2時間かけ、ゴロゴロした岩場の急斜面の川の中を一系列になり登りながら、上流にあるゴールのマヤロックを目指す。時に足のつかない滝つぼに飲み込まれ、垂直にそそりたつ岩場に爪をたてしがみつきのながらも、自然と前後の友だちにも気を配り、手を差し伸べる姿がある。自然の中で活動していると、そういうことが普通にできるようになってくる。

先頭に行く小2、小3の男の子、体が小さい小4の女の子は、必死になって谷さんを追いかける。谷さんは彼らにちょうどいい難しさのルートを選りながら、スリルとチャレンジを常に提供してくれる。時折、川の流れに流されそうになったり、苔むした岩に足を取られそうになりながら、濡れようが落ちようが、クモが居ようが食らいついていく。谷さんは3人のそれに応えるべく、声をかえ、盛り上げ、更に難易度を挙げていく絶妙なリード。真剣な表情の合間には、気持ちよさげな、嬉し気な笑顔もたくさんあふれた。特に小4の女の子は、昨年とは一転し、引っ張られるというより、前へ前へと自分から動く。言葉は少なげだが、気持ちも積極的だ。滝打たせにもどンドン入り、気持ちよさそうに滝浴びしていた。

一方、後方の中1の男の子は大嫌いなクモに大苦戦。小さな虫が飛来する、ちょっとした岩と岩の水のない隙間をぬって、待ち伏せするように巣を張るクモがここかしこにおり、テンション低く絶不調。どんなに女の子たちからかわれたり笑われても、いつもの元気も覇気もない。すると、後方の暗い雰囲気を感じたのか、先頭集団にいた小3の男の子が、クモの巣をすべて取り除きながら前進を始め、「くもの巣、全部駆除していくから」。すると、生き返ったように歌いだしご機嫌になる中1。その様子を見て大笑いする余裕の小5女の子。年齢を超えて、互いに助け合い補い合う8人。1時間半をかけ、無事、マヤロ

ックへ到着し、おやつを口にした。午後のスケジュールがタイトのため、ひと休憩したら森を抜けながらの下山。かなりハードなスケジュールだが、子どもたちは元気にケガなく歩き切った。ランチはいったん宿に戻り、テラスにてそうめんと稲荷寿司。食べ終わったら、再び車にのって、1年ぶりの星砂の浜シュノーケリングへ出発。

今年の星砂の浜は、昨年以上に混雑していて、石垣港を出て以来久しぶりにたくさんの人間に囲まれた。外国語も飛び交っている。潮が引いているのでシュノーケルポイントが限られており、人が極狭い場所に集中している。考えてみれば、この数日間のツアーは、他の観光客と交わることなど皆無だっただけに、いわゆるフツウの海水浴場的な混み具合は、異様な光景にも見え、子どもたちにとって「離島」「秘境」「最果て」の西表島のイメージとはかけ離れた景色に思えたことだろう。一旦海にもぐればもちろん素晴らしいサンゴ礁なのだが、顔を水面から上げて人々の喧騒や浜の人手を見ると、なぜかテンションが下がってくる。谷さんがツアーを組む時、必ず観光地を外す理由が、改めて分かった気がした。子どもたちも同じことを感じていたのではないだろうか。2時間弱のシュノーケルを終え、星砂を少しだけお土産にもらい、谷さん号に戻った時には「すごい人だったよ。観光地じゃなく、谷さんが連れて行ってくれる場所がやっぱり一番だね」と話していた。

島での生活も6日目に入り、準備も片付けも上手にできるようになってきた子どもたち。今日は川とトレッキング、海とシュノーケリングと盛りだくさんだったから、タオルも弁当ガラも、おやつも、サンダルも、水筒も…とフル装備だった。夕方のシャワーも手際よくなり、水着の下洗いやコインランドリーも慣れてきた。もちろん、そこには大きく年長者たちのフォローも加わっていた。中2と高1の女子力は昨年以上に冴えわたり、スタッフからも頼りにされる存在であった。

長期滞在ということで、時々、シーツや枕カバーを替えてもらったり、自分たちで自主的に掃除機をかけたりもした。女の子三人部屋は、小5を筆頭にしっかりものの小4が続き、片付けが苦手な小3も一緒に仲良く片付け。こざっぱりした部屋でごっこ遊びをする3人の姿は、まだまだ子どもだもんねと気づかされる。小2・小3の男の子二人部屋は、男性スタッフと同室。しかしそんなことはお構いなしで、敷きっぱなしの布団の上で、休憩時間は子犬のようにじゃれ合い、プロレスごっこをしている。一番年下である彼らにとって、日々の活動は、親元を離れて体力的にも精神的にもついていくのに必死。部屋での時間は、何より心の支えであり、安らぎの時間であった。一方、小5・中1の男の子二人部屋は、雰囲気は全く違う。兄弟が多い二人にとって、一人になるのが一番心細いらしく、毎晩夜中に覗きに行くと広い部屋の真ん中で二人体を寄せ合って就寝。長男である小5にとっては、中学受験や進学を相談したりして、お兄ちゃんができるような心境だったかもしれない。休憩時間にはテレビのクイズ番組に二人で挑戦し、ずいぶんと盛り上がっ



ていた。最年長の中2と高1の女の子部屋には、トランプや花札をするために、年齢性別問わずみんな集まってくる。思春期真っ只中の彼女たちだが、決して一回たりとも迷惑がらず弟妹たちを寛大に受け入れてくれるので、みな居心地がいい集合場所になっていた。

## 7月28日（金）7日目

冒険の旅もいよいよクライマックス。今日は白浜よりボートをチャーターして、一日がかりで秘境イダの浜へ。ウミガメとどうしても泳ぎたくて、ここまでやってきた。米蔵（よねぞう）さんは、イダに一番近い船浮（ふなうき）集落に住んでいて、谷さんの右腕としていつもボートを出してくれる船のオーナー。船浮の港近くにはウミガメが住み着いていて、上からのぞくと岩のように何匹も目視することができる。こんなところに住みたいなあと話すと「小学生は3名、中学生は2名。君たちが来たらモテモテだよ」と米蔵さん。子どもたちは小さな学校に驚いていた。

途中、米蔵さんの船は「ミズオチの滝」に寄り、ボートの上で水浴び。海に直接おちる淡水の滝は貴重な水資源で、船浮集落では毎日水くみにきていたという。ミズオチの滝から再び航路にもどり、ボートで5分ほど。バッシュャ！バッシュャ！と波を切ってエンジンフル稼働で5分、水面を飛ぶように船を走らせる。いよいよイダの浜に上陸だ！！

ブルーシートを広げた木陰に荷物を降ろし、米蔵さんの船を見送ると、目の前に広がるのは、穏やかで広大なサンゴ礁の海。沖合の濃い青色は海が深いことを示している。いかにもウミガメが泳いでそうな気がする。ウミガメを見る為には、足がつかない場所での長時間のシュノーケリングを強いられるが、この1週間で子どもたちはすっかり経験を積み、自信もつけていた。小4・小5の女の子たちは、一瞬にして去年の記憶がよみがえったようで、率先して谷さんの左右にポジションをとり、一步も後れを取らず海へ入っていく。絶対にウミガメが見たい、一緒に泳ぎたいという、意気込みの強さが感じられる。小2・小3の男の子たちも、この1週間の集大成として、気合を入れて臨む。泳ぎ切れるかなあ？と少し不安も見せたが、みんながフォローするから大丈夫だよ、との仲間の即答の声に、「うん！」と元気な返事をした。

浅瀬から様々なサンゴが広がり、魚の種類も桁違いに多いイダの浜。今日のコンディションはそう悪くない。雷雲が多少気になるけれど、今のところ海の透明度はいつも通り高く波も穏やかで、ウミガメとの遭遇は期待できそうだ。いざ遭遇できたときに全員見逃すことがないよう、まとまって泳ぐ。意識はしていても、7日目の疲労度や泳力の差は、長時間遠泳になればなるほど広がる。しかし、そこを泳ぎが得意な者が手をつないでバタ足で

引っ張ったり、遅れる子の足を持って勢いをつけて前へ押し送ったりして、一人も脱落しないよう皆で縦列・横列になり、沖のポイントへと進む。フォローするほうもそれなりに消耗するが、「助け合いながら全員でやり遂げる」…そこに最終日のイダの浜の醍醐味があることを、言葉にせずとも誰もが理解している。

30～40分泳ぎ進んだ頃、沖合1kmあたりのサンゴ礁の中に、大きなアカウミガメを見つけた。サンゴで囲まれた影にひっそりと休んでいたが、子どもたちに気づいてウミガメは泳ぎ出した。悠々と水中をゆくウミガメ、のんびり手足を動かしているようにも見えるが、推進力はすさまじい。一緒に泳ぐことで、いかにウミガメが速いかが分かる。逃げる、追いかけるなどおこがましいほどのスピードの差。自然の中では、なんと未熟で力ない人間。ウミガメの余裕さ、一人勝ち。子どもたちは必死に全力で水面をフィンで叩き、何とかついていこうとする。ウミガメはサンゴ礁を離れ、広く深くひんやりとした海水のエリアへ泳いでいく。子どもたちはその後ろ姿に見とれてどこまでも追いかけていったが、気が付くとどンドン沖に向かっていて、谷さんから「その先は竜宮城だぞ～。もどってこ～い！！」と引き返しの合図。藍色の海面にみんなで漂いながら、深く深く潜っていくウミガメに「バイバ～イ、ありがとう」と手を振った。

この日はウミガメには一匹しか会えなかったものの、徐々に浅瀬に戻りながら、カクレクマノミやオオシャコガイ、スイミーのような小魚の大群を終日満喫した。泳力に自信のある者はライフジャケットを外すことを許され、5m程の深さを自由自在に素潜りして、目の前でじっくり生き物を観察したり、海底に落ちている貝やオオナマコをとって浮上して楽しんだ。途中、接近中の台風の余波もあり、海上で激しいスコールに何度も見舞われた。背中には淡水雨の砲弾が痛いほど突き刺さるものの、水面を画して海の中は変わらず静かで、ちょうどその境にいる自分たちが不思議な感じだった。

毎年のことだが、このイダの浜が最後の海となる。ランチを食べている時間、米蔵さんの船を砂浜で待っている時間、ふっと目の前の美しいエメラルドグリーンの海を見て、「ああ、幸せだなあ」「きれいだなあ」「帰りたくないなあ」「また来たいなあ」と、子どもたちはそれぞれに様々なことを思う。だから、いよいよ米蔵さんの迎えが到着し、乗り込んでしまうと、とっても寂しい気分になる。これで本当におしまいなんだ、と。今年も変わらず、帰りの船では、言葉少なげに海風を感じ海を見つめる子どもたちがいた。子どもたちの思いをかき消すように船のエンジン音だけが広い海に響き渡り、ざっばざっばと水しぶきをあげ、拠点の白浜港へ一路向かった。

最終夜のふりかえりの時間、裏ではサプライズパーティが着々と準備されていた。小3の女の子の誕生日とスタッフの結婚祝いだ。島にはケーキ屋がないので、玉盛スーパーで

手に入る食材を活用し、谷さんにもカットフルーツの提供をお願いして、手作りケーキが2つ出来上がっていた。チョコレートペーストをビニールに入れて絞り作ったネームプレートもついている。スライドショーの途中、ドアをロックする音。三線（さんしん）を手に、突然真理ちゃんが入ってくる。真理ちゃんは、私たちと同じ時期に同宿に滞在していた一般客で、2日目以降、一緒にツアーにでかけ意気投合、その後、ボランティアスタッフのような存在として色々面倒を見てもらった、神戸出身の可愛いお姉さんである。ここ数日ですっかりメンバーの一員になっていた真理ちゃんは、習いたての三線を使い、ハッピーバースデーのBGMを奏でてくれた。その曲が終わるころには、中2と高1の女の子たちが大きなケーキ2つを部屋に運び込んだ。島人かあちゃんが骨折のため、当初はケーキ断念の話を聞いてどうしたものかと悩んでいたが、結局子どもたちが協力して立派なものを作ってくれたのだ。主役の小3女の子も祝福されたスタッフも、ビックリしながら感激していた。みんなでもう一度ハッピーバースデーを歌い、ケーキを食べた。島での最後の夜が、楽しいひと時と三線の音色ともにふけていった。

## 7月29日（土）9日目～（以降、延泊3泊4日）

西表島最終日となるはずだった今日の未明から、台風10号の影響で風と雨が強まっていた。島人は「今回の台風は、そよ風程度だ」と言っていたが、結局、石垣行き的高速船の終日欠航が早朝決まった。この時点で、私たちの鹿児島帰省は8月1日になり、飛行機の座席確保の都合から3泊4日の延泊が確定した。台風が発生した時から、その動きは注視していたが、夏の沖縄の繁忙期にあって、10名の宿泊先と飛行機を直近でまとめて格安に確保するのは、大金支出を覚悟しなければ不可能であった。

台風恋いをした子どもたちは、内心ほくそ笑み、登校日や部活が気になる中学生は、イライラが募る。帰りたくはなかったが、帰るつもりだっただけに、気持ちの整理には多少時間がかかった。保護者へ連絡し了承を得た後、子どもたちを全員集合させ、現時点の状況と今後の見通しについて説明した。また一人一人の事情や気持ちを聞いて、個別行動をとって早めに帰る方法を選ぶかどうかも考えてもらった。

最終的には、全員で最後まで行動を共にすると全員一致で決まり、せっかくだからこの状況も楽しもう！と、全員が前を向いた。保護者とはいつでも連絡を取れるようにし、携帯電話を開放した。子どもたちは生まれて初めての経験に、ドキドキしながらも落ち着いて保護者に電話を入れ、無事を伝えたり学校への言付けを頼んでいた。

台風はやはりそよ風ではなく、ちゃんとした台風であった。風も吹き、雨もそれなりに

降り、一瞬だが停電もした。船が止まることで、ライフラインがストップしてしまう離島の暮らし。しかし、島の人々は心得ていて、スーパーから商品がなくなることはなかった。子どもたちは落ち着いて自分のランチを玉盛スーパーで確保して、風と雨の音を聞きながら、ゆったりと鉄筋コンクリートの宿（島時間）で安心して台風を終日やり過ごした。宿題を済ませる者、8日間の疲れを取るべく泥のように眠る者、トランプをしたりプロレスをしたり、変わらず楽しく過ごす者など、思い思いに1日を終えた。

明るく30日(金)、台風10号の影響もなくなり、午前中は由布(ゆぶ)島、野生生物保護センター(再訪)の二コースに分かれて観光にでかけた。再びバスの運転手・兒玉さんと遭遇。「まだ居たのか〜(笑)」とからかわれながらも、再会を楽しむ。午後は、港のお土産屋で買い物と、芭蕉布の織物や漆喰のシーサーづくりワークショップなどを楽しんだ。本来ならばこのまま8月1日まで西表島で過ごし、更なるアクティビティを体験したいところだが、台風11号が明日にも西表島に接近するとの予報。谷さんのおすすめの石垣島の民宿「八重山荘」に宿も確保できたことから、10号と11号の合間を縫って航行している今日を逃さず、15時30分発の高速船で石垣島へ移動を決めた。ツアーにすでに出かけている谷さんには会うことができなかったが、代わりに真理ちゃんが港で最後まで見送ってくれた。思いがけず延泊となった今回の西表島。そして島での台風体験。また違った意味で、記憶に残る旅となった。石垣までの船は大揺れだったが、すっかり波の揺れにも慣れて、気分を悪くする者はいなかった。途中、ウミガメが荒れ狂う波間に顔を出して、私たちの船を見送ってくれた。

石垣港につくと、天気は曇り。海上以外は対して影響がない。市街地中心部である730記念交差点を通過しようとする、7月30日記念にと冷凍パイナップルの無料サービスに遭遇。なんだか歓迎されている気持ちになった。

31日(月)にはレンタカーを2台借りて、石垣島一周観光へ。県内最大の鍾乳洞を訪ねて、改めてサンゴ礁の隆起した島であることを実感。リスザルの繁殖地や古民家ミュージアムでの民謡体験、景勝地<川平湾>と、こんなことでもなければ来なかったであろう石垣島の観光地を巡り、大満喫の1日だった。リスザルは、とても愛くるしい動物で、子どもたちは有料のエサには目もくれず、森の中から木の実を探してきて手なづけ、職員の度肝を抜いていた。古民家ミュージアムでは、時間外にも関わらず、おじいとおばあがわざわざ子どもたちの為に演奏をしてくれ、全員で六調(即興踊り)を踊ったり、カスタネットのような民謡用打楽器(四つ板)の使い方を丁寧に教えてくれた。3日間お世話になった八重山荘は、古いがきれいな施設で、娯楽室と称してトランポリンやギターピアノ、カードゲーム、将棋、囲碁などが自由に楽しめるようになっていて、子どもたちにも評判だった。またコインランドリーもあったので、ここでもみんな協力して洗濯をしたり干した

りと、西表島の時と変わらない生活をしていた。

食事は、宿の都合であったりなかつたりだったので、外食や弁当、コンビニのおにぎりなど、子どもたちのリクエストを最大限優先して決めた。お好み焼き屋では、みんなで注文し少しずつシェアしたり、弁当を買いに行く足がない時は、レンタカー屋に協力を得て、送迎途中で弁当屋へ寄ってもらったりと助けてもらった。石垣に渡った後からは、お金のことが気になるらしく、「食べたい物」より「安い物」を選ぶ子どもたちの姿が、とても健気に見えた。みんなでそろって食べたのが、塩のソフトクリーム。ソフトクリームももちろんおいしかったが、その後の水が何よりおいしかった。

8月1日(火)。午前9時48分のバスにのり、一旦、石垣港に。荷物の大きさをみて宿のおかみさんが気を利かせて荷物だけ自家用車で運んでくれた。また、人数オーバーの部屋の件も気にしてくれていたらしく、チェックアウト時に全員に黒糖のお土産を持たせてくれた。こういう小さな気持ちが、とても心に響く。港から10時20分のカーリー観光バスに乗って、一路、石垣島空港へ。みな仮眠をとって体力温存。11時30分に石垣島空港にてランチ。八重山そばや石垣牛など最後にリッチに食べ納め。この日は「観光の日」だったらしく、空港ではトロピカルジュースやかき氷、トロピカルフルーツのふるまいがあって子どもたちも喜んだ。那覇行きの飛行機は、定刻より5分遅れの13時に出発。14時到着。その後、毎年恒例の空港全部を使つての鬼ごっこやケイ泥。沖縄フードである、A&Wでのビッグバーガーを堪能。強い日差しが差し込む空港が夕日に包まれる頃、19時50分、鹿児島へむけ離陸。今年はさすがに「帰りたくない」という子どもは、一人もいなかった。鹿児島行きの飛行機では、小2と小3の男の子二人が、隣り合わせた鹿児島在住の小学生の男の子たちと、おもちゃの話題で意気投合。寝る暇もなく盛り上がっていた。西表島での体験や台風のこと、石垣島観光など、11日間にわたる大冒険を、少し自慢げに説明している二人が可愛かった。

鹿児島空港によりやく到着し、荷物を持ってロビーに出ると、首を長くして我が子の帰りを待っていたお父さんお母さんが笑顔で出迎えてくれた。子どもたちもとても嬉しそうにそして、安堵した表情をみせた。「お疲れさまでした。大変でしたね。」「長い日程、お世話になりました。いい体験させていただいて」など、労いの言葉を頂いた。更に別れ際、子どもたちから「西表島に連れて行って来てありがとう」の心のこもった色紙メッセージ…感無量だった。

## 最後に

予期せぬことで不安もいっぱいあっただろうが、一言も泣き言をいうことなく、最終日まで明るく笑ってついてきてくれた8人の可愛い子どもたち。本当にありがとう。4日間の延泊は、ご家族にとっても心配でならなかったろうと思うと申し訳ない気持ちでいっぱいだが、8日間の西表島と同じくらい、いろんなことやいろんな人との出会いやハプニングがあり、ハッピーがあり、笑顔があった。何が起きても結局8人で乗り越えてしまった子どもたちには、もうスタッフなど必要ないかもしれない。10年後には、今回の旅の経験を糧に、世界へ旅立つ者もいるかもしれない。そう思うと、彼らとのこの11日間の旅路は、私たちスタッフにとってもかけがえのない一生の宝物に思える。

素晴らしい11日間の冒険の日々を支えてくれた、谷さんを始めたくさんの方々、そしてそのチャレンジを準備から到着まで温かく見守り応援して下さった保護者の皆さまにも、心から御礼申し上げたい。